



てまでもいろいろな物をやっていたほどでした。

明治四十三年私が中学二年のときでした。兄は京都の第三高等学校（旧制）に入学したのですが、脚気をわずらって学校が始まって行くことができないのです。脚気は転地したらよいというので、母は兄をつれて小浜温泉に転地して養生していたのです。しかしあまり長くなるので学校がおくれるというわけで、十分快くならないまま京都に行ってしまったのです。それから五年間、兄は帰って来なかったのです。五年間、母は大変心配し続けていたのです。ところが五年たった後、たまたま兄が知っていた弁護士の家不幸があり、そのため五年ぶりに帰ってきたのです。長崎を出るときはまだ脚気がよくならず、そのまま出かけていったのに五年ぶりに帰って来た兄は、非常に元気で帰って来たので母はすっかり安心したのです。私の病気が顔にありありとあらわれているのです。私はそれに気がつき、長崎の氏神の諏訪神社に毎日おまいりし